

Title	印度の原住民
Sub Title	
Author	佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.21, No.3/4 (1943. 6) ,p.141(421)- 169(449)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430600-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

印 度 の 原 住 民

佐 原 六 郎

— 原住民と先住民 —

現今世界に國家と稱せられるものの數は決して尠くない。けれども大小強弱數多き諸國家の國民にして、その中に全く何等の民族的異分子をも含まざる純粹の單一民族のみより成るもののが果してあり得るであらうか。國民の民族的同質性を強調する所謂單一民族國家でさへ、これを嚴密に分析するならば、

その中に少なからざる種族的混血や文化的交流が見出されるのであるから、太古蒙昧の時代より近代に至るまで常に諸異族の侵入や寇掠の絶えなかつた印度に於てその民族的異質性が他に殆ど類例のないほど甚しいのは寧ろ當然である。印度が地理的に見て極めて統一に都合よき様相を呈するに拘らず、現實には政治、宗教、言語、習俗、その他の諸點に於て、殆ど絶望とさへ思はれるほどの統一難に直面するのも結局印度特有のこの甚しき民族的異質性に基くものと考へられる。

然らばかかる甚しき異質性は如何にして生じたのであらうか。勿論それは過去數千年の永きに亘つて印度に侵入せし諸民族と原住民族との混在に依る所以であるが、それを説明せんがためには現在各地に寄木細工的に分布された多種多様の住民を歴史的に考察して夫々の住地の移動、文化的又は政治的勢力の消長などを明かにしなければならない。事實、印度では古く侵入して既存の先住民を驅逐せる外來異族が廳て次の時代には一種の先住民となつて更に後に侵入し來れる異族のために制壓されたような事例も少くない。この場合本來は外來異族であつたものがその移動年代の極めて古きため、或は又外來者たるの證據が稀薄となつたため、所謂原住民と見做されるに至ることもある。それ故、印度に於ては原住民なる名辭の使用に餘程の注意を拂ふ必要がある。獨り印度のみならず、他の何れの國に於ても絶對の原住民を求めることが不可能に近い事は云ふまでもない。結局原住民とは現在までに發見せられた確實なる證據に依て最古の先住民と認め得るものと指すのであつて、今後の新發見や新研究が更に一層古き先住民の存在を立證するに至れば、先に原住民と認められたものも單なる先住民と稱し得るに過ぎなくなるのである。

原住民なる名辭を以上述べしが如き意味に解して私はこの小論に於て、先づ明白なる印度の外來異族たりし吠陀アーリア人を標準とし、それ以前の先住民と思はれるものを順次に考究して、その何れを最古の先住民、即ち原住民と見做すべきかを述べて見たいと思ふ。

二 印度石器人

從來印度の民族と文化とを問題とするとき、その最も古き、且つ優秀な、代表としてはインド・アーリア人とその吠陀文化とを擧げるのが普通であつた。勿論この舉例は今日でも大體に於て妥當ではあるけれども、而も吠陀文化を以て印度最古の文化と見做すことは最早許されなくなつた。何故ならばインド・アーリア人は、彼等の五河地方に於ける植民の文學的記錄たる梨俱吠陀の證明する如く、明白なる外來異族であり、又彼等の侵入以前の印度が全く文化を缺如せる蒙昧の地であつたわけでもないからである。特にパンジャーブ州モントゴメリー郡のハラッパ及びシンド州ラルカナ郡のモヘンジョ・ダローに於ける極めて古き都市址の發掘によつて明かにせられた所謂インダス流域文化の如きは、少くともその都市の發達や美術工藝などに於て、吠陀アーリア人を遙に凌駕する高度のものであつた。然らば吠陀アーリア人以前の印度の住民には如何なるものがあつたであらうか。

考古學者の中には蒙昧期の人類最古の遺物として原石器又は磨石器なるものを認め、更にこの原石器にも第三紀及び第四紀に屬するものを分けてその各々に數期の時代を劃する人もあるが、印度では未だ西歐學者の所謂原石器に相當するものは發見されてゐない（但しどビルマに於ては原石器の發見が報告されてゐる）。けれども未だ磨かれざる粗野な舊石器ならば印度に於ても相當多く發見せられた。而して

これらの舊石器出土の地域としては南印度のコロマンデル海岸、中央印度のナルバダ河流域、ビハール、オリッサ、チヨホータ・ナグプール、ラジュプターナ等が挙げられ、更に近くはボンベイ州カーンディバリ及びパンジャーブ州ソーアン河流域からも多數の實例が發見された。

さて以上諸地域より出土せる多數の舊石器に就てブルース・フート (4、この數字は本小論末尾所掲の引用文献表中の番號、以下記載の數字も同様) は十種の類型を分けたが、コーニン・ブラウン (1) はこれを三種に大別した。而もこれらの類型は石器出土の場所に於ける地層上の區別に基いたものではなく、石器そのものの形狀又は製作法の推定に依て定められたものであつて、未だその十分なる編年は遂げられて居ない。

印度舊石器の中、最も特徵あるものは所謂拳打器 (*coup de poing*) である。これは石英岩の小塊を打ち敲きつゝ薄片を剥落させて作製したもので、それには西洋梨形と卵形との二形式が多い。その他の舊石器には暗珪石の搔器、石刀、皮剝などがあり、形式上に於て西歐學者の所謂シニレアン及びアシニアン期に屬するものと推定された。又これらの最も古き石器を殘した印度舊石器人はローガン (7) に依て石英岩人 (*quartzite men*) と呼ばれ、極めて廣範圍に亘つて棲息せしことが明かとなつた。尙ほ V・A・スミス (12、二頁) によれば、この石英岩人出現の以前にも何一つの痕跡をも残さざりし先住人類の棲息したであらうこととは當然推測されるけれども、今日までの積極的知識の及ぶ限りに於ては石

英岩人を以て印度最古の人類と見做すべきであると。又一九三五年ド・テラ (H. de Terra) がヒール及びケインブリッヂ兩大學の北印度調査隊を指揮して行つた地質學及び氷河學上の研究は印度史前學に地質學的基礎を供するの貢獻を爲したが、これによつても印度に於ける石英岩人出現の中洪積期であつたことが確定された。

印度でも、他の古き地帶に於けると同様に、舊石器人に次いで磨石器使用の新石器人が現れた。新石器は一八六一年からその翌年にかけてル・ムズニリエ (H. P. Le Mesurier) 及びスキブルズ (W. Theobalds) が聯合州に於て發見せしものをはじめとして最近に至るまでの間に石斧、石鑿、石鎌、搔具、石矛など極めて多種多様のものが出土した。而してこの時代には前期の特徴たりし明色の石英岩よりは寧ろ暗色火成岩の石器が多く作られた。又この新石器人が既に土器を作り、家畜を飼ひ、土地を耕作せしなど種々の方面で舊石器人よりも遙に高き生活程度に達してゐた事も明かにされた。然るにこの新舊兩石器時代が繼時的に現れたのか、或は又兩時代の間に斷絶があつたのか、と云ふ問題に關して學者間に異論が生じた。即ち前述のフート (10, (a)、九四頁、參照) はグジャラートのサバルマティ河の或る地層斷面に於て夫々新舊兩石器の發見された二つの異なる層の間に二百呎以上の堆積物の介在せし事實を指摘して、印度ではこの兩石器時代の間に永き斷絶があつたと主張した。之に反してスミス (12, 二頁) はかかる斷絶は自然界に於ては殆ど起り得ず、又人類の連鎖の中途にかかる斷絶ありしを推測せし

めるような根據は殆ど無いと云つて、新石器人を以て舊石器人の後裔に非ずと爲す説を否定した。スマスは又兩石器時代に數百年乃至數千年の間隔があつたと爲す説は結局記録の不完全とその結果生ずる吾人の無智とに基因するのだと考へた。乍然この問題について今こゝで論及する必要はない。恐らく「インドは嘗て一度も荒涼たる大陸であつたことはなくて、その國土上には、最初の人種の流れと共に、比較的近代の文明の流れ——例へばアーリア人の文明——が流れてゐたものである。第四紀以後、インドの領土上には人間が群がり住んでゐたのである」(E.ピッタール著人種學的に見たる民族發達史、第四分冊、一三七頁)。何れにしても印度に新舊兩石器人の存在せし事は疑なきところである。

III インダス流域文化とその民族

印度の考古學者 N. G. Majumdar (10, (a), 九六頁)によれば北印度ではヨーロッパに於けると同様に金屬(特に銅器)時代が石器時代に次いで現れはじめた。而してこの事はベンガールからバルチスタンに至る諸地域より出土せる多數の銅器によつて證明された。又同じく印度の考古化學者たる Khan Bahadur Mohammed Sana Ullah (10, (b), 一九三頁)は多數に發見された金屬器の中最も古き地層より出土せるものを分析研究せる結果、今から約四千年前の昔インダス河流域地方では青銅器の作製ありし事、又銅器は更にそれよりも古き時代に使用されし事を明かにした。又これらの青銅器の含む錫の

割合は比較的に貧弱で、一割以上に達するものは極めて少ないが、これはこの地方に於ける錫獲得の困難と、この時代に於ける青銅作製技術の未熟とを語るものだと云ふ。かくの如く北印度では銅及び青銅の時代の存在が證明されたけれども、之に反して南印度では銅器の發見なく、從てこの地方ではアフリカに於けると同様に石器時代は銅器時代を経ずしてそのまま徐々に鐵器時代へ移行したものと推定された。

さて印度の文化は銅器時代に入つて始めて飛躍的進歩を遂げた。この進歩の跡は所謂インダス流域文化の發見によつて證明されたのである。一九〇二年印度の考古學者 R. D. Banerji はインダス河右岸の Mohenjo-Daro (死者の場所を意味す) に於て一基の古きストゥパを調査した。ストゥパはこの地の最高の丘上に在り、後にその附近より出土せるクシャーン王朝ヴァスデヴァ一世の古泉により大體西紀第二世紀初頭の創建と推定された。バナージはこの時ストゥパそのものに就いては何等重要な發見を爲しえず、たゞこの最高の丘をはじめ僧院や寺院の遺跡の認められる第一の丘、更にそれを繞る幾つかの小丘を含む一帶の地域が古き昔それらの佛教建築物を中心として榮えた村落又は都邑たりしを認め得たに過ぎなかつた。然るにその後一九二二年からバナージの行ひし發掘作業は意外にも約四十四エーカーにも及ぶこの丘陵地帶の地下に整然たる街路、二階建煉瓦造の住宅、宏壯なる公共浴場、完備せる下水渠などを含む立派な計畫都市の埋没してゐた事を知らしめた。而もこゝで發見された多數出土品の中には種

タの動物の形や一種の象形文字の刻まれた滑石製印章をはじめ、金銀銅などで作つた耳輪、指輪、束髪用留針などの装身具、テラコッタ、石造及び青銅製の彫像、種々の彩色土器、その他何れも考古學及び美術工藝史上極めて貴重なる資料があつた。斯くてモヘンジヨ・ダローは、同様に古き都市趾の發見されたバラッパと共に、西紀前三千年頃までも遡り得る印度最古の文化を現出せし由緒深き場所なる事が明かにされた。これに就いて印度學の泰斗ジョン・マーシャルは一九二四年に次の如く述べた。

「從來印度は一般に世界に於ける若き國の一つと見做されて居た。舊石器、新石器、ラージャグリハの巨石積垣壁などの如き粗雑な原始的遺物を除けば、西紀前三世紀以前に遡り得る注目に價する紀念物は一つも知られてゐなかつた。西紀前三世紀と云へばギリシャは既にその最盛期を終へ、メソポタミヤ及びエチオピトの大帝國は既に忘却されて丁つた時代である。然るに今や一躍して吾人は印度文明に就いての知識をそれよりも約三千年も古き時代に遡らせて、その頃パンジャーブ及びシンドの住民が立派に構築された都市に生活し、且つ高級なる美術工藝、進歩せる象形文字の系統などを伴へる相當に圓熟せる文化を持ちし事を確信し得た」(10、(a)、九八頁)と。

勿論印度にも既述の如き舊及び新石器をはじめチャクラマーール、シンガンプール、ミルザープールその他に於て發見された洞窟繪畫のような極めて古き史前遺物も存在するがそれらは何れも單に漠然たる人類棲息の證據となつたに過ぎず、一定の特殊民族及び特殊文化に歸屬せしめ得るものではない。從

てモヘンジヨ・ダローの發掘以前にはこれらの断片的遺物を除いてマウルヤ朝以前に屬せしめらるべき特殊の民族及び文化の確實なる遺跡は全く知られて居なかつたのである。この意味に於てマーシャルも述べし如く、少くとも考古學上では、印度は若き國の一つと見做されざるを得なかつた。

さてモヘンジヨ・ダローその他インダス河流域の諸地方で新しく發見された多數の考古學資料に就てはマーシャル（8）をはじめ多くの印度學專攻の學者が各方面から周到なる考證を加へ、結局それは吠咤文化を生みしインド・アーリア人とは全く異なる一種の先住民の遺せしものなる事を明かにした。彼等は又その先住民とバビロニアのスマリア人ととの間に種々共通特徴の存することを認めた。斯くてモヘンジヨ・ダローの文化は一時インド・スマリア文化と假稱された程であつたが、今日では一般にインダス流域文化又はインダス文化と云ふ地域的名稱を以て呼ばれるようになつた。更にその後引き續いて發掘された金石併用時代以後の多くの出土品に依てこの文化はハラッパ及びモヘンジヨ・ダロー以外ではパンジャーブ及びシンド兩州のアムリ、チャンフー・ダロー、ロー・ハムジヨ・ダロー、などから遠くアフガニスタンのナル、ダーバー・コットその他廣範圍に亘つて分布せしことが判明した。

然らば斯くも高度のインダス文化を生みし非アーリア的先住民（以下之をインダス人と略稱す）とは如何なる民族であり、又彼等の活躍せし時代は果していつ頃であつたらうか。

モヘンジヨ・ダローの發掘は先づこの都市が七つの異なる層を爲して居た事を示した。これら七層の

中で第一、第二、第三の上三層はインダス文化の末期に、又第四、第五、第六の中三層は中期に、更に最下の第七層は初期に屬するものと推定された（2、一四四頁參照）。而もこれら三期の間にはその建物の性質から見て大した相異はなく、殆ど同様の特徴が認められた。たゞ僅かにこの都市が最後に埋没せし時の最上層の部分にのみ技術上幾分か文化的退歩の跡を偲ばしめるものがあるに過ぎず、その他の點では最上及び最下の兩層を比較して見ても建物の材料や構築の様式に於て殆ど變化がないのである。

從て初期と末期との間に大して時代の懸隔のなかつた事、又各期の住民が夫々別個の民族に屬したものとは考へられない事が主張される。他方又モヘンジヨ・ダロー出土の多數の印章に刻まれた動物は虎、犀、象など、何れも濕地を好む種類のものであり、又この地方で發掘された銅器及び青銅器が何れも甚しく腐蝕して居た事などから考へても、この地方が現今よりも遙に多量の濕氣と鹽分とを含んでゐた事が推測せられ、更に又度々襲來せし洪水による被害も相當に甚大であつたらうから、折角の立派な煉瓦造建築群も比較的に短命にして埋沒するの運命を持つたものらしい。それ故マーシャルも初期と末期との間に五百年以上の間隔があつたとは思へぬと述べ、又その間隔が假りに五百年であつたとするも、その間常に大差なき同程度の文化が繼續したものと認めた。

次にモヘンジヨ・ダローに於ける上述の三期が果して西紀何年ぐらひに該當したであらうかと云ふ問題が起る。カールトン（2、一四五頁）によればメソポタミアのエシュヌナで發見された或る古き印章

は西紀前廿六乃至廿七世紀のものと判定されたが、これと全く同様式の印章はモヘンジヨ・ダローでは末期の層に於てのみ出土したのであるから、インダス文化の初期はそれよりも約五百年古き西紀前三千年頃であつたらうと。又彼に従へばスマリアのウルの古墳に於て發見された同様の印章は前二一五〇年よりは古く、遅くも前廿世紀を下らないと推定された。而してエシュヌナ及びウルに於けるこれらの印章はバビロニア特有の圓筒印章で、たゞその彫刻だけがモヘンジヨ・ダローの典型的な方形又は長方形の印章と類似してゐたのである。然るにバビロニア式圓筒印章にしてモヘンジヨ・ダローに於て發見された少數の例は何れも末期の層から出土した。他方又ウルに於てもインダス文字の刻まれた典型的なインダス印章が發見されたが、これはサルゴン大王（その治世は前二七五一年頃よりと推定さる）を始祖とするアッガード王朝よりは古き時代の古墳より現れたのである。かくて結局カールトンはモヘンジヨ・ダロー文化の末期を西紀前廿六乃至廿五世紀、中期を廿九乃至廿七世紀、初期を卅世紀頃であつたらうと主張した。

インダス文化の編年に就てはこの外にも尙ほ種々の異説もあつて、之を正確に定める事は困難であるが、大體に於てこの文化は前二八〇〇年頃には既に十分に發達して安定期に入つて居り、その後漸次に衰へたるもアーリア人の印度侵入を開始せる前二〇〇〇年頃には尙ほ多少は榮えてゐたものと推定せらる。さて次に問題となるのはかかる高度の文化を遺したインダス人が果して如何なる民族であつたか

と云ふ事である。先づインダス人の身體的特徴を知る上に最も必要なる人骨の研究は既にシユーワエル大佐 (Colonel R. B. Seymour Sewell) 及び印度動物學調査會のグーハ (B. S. Guha) によつて行はれた筈であり、グーハの中間報告 (10, (a), 一〇七頁参照) によれば、インダス人は主として11つの類型の長頭人種より成り、更に短頭的要素も含まれて居て、これら三つの類型はアル・ウバイド (Al-Ubaid) 及びキッシュ (Kish) に於て發掘されし古き人骨に就いても認められ、サルゴン大王以前のイラク地方とインダス地方との住民に共通の人種的特徴が認められるとの事である。もしウォデル (13, 四一頁) の主張する如く、モヘンジヨ・ダロー及びハラッパの兩都市がサルゴン大王以前からのスマリア人の植民地であつたとするならば、インダス人とスマル人との間に文化上のみならず人種上の共通點の認められるのも當然の事である。又カールトン (2, 一五〇頁) はモヘンジヨ・ダローの所謂H・R區第八號家屋の構造について特にその居間の天井が床から七呢しかないと云ふ事を根據として、當時の住民の低身型なりしを推定した。彼は又同じくモヘンジヨ・ダローにて發見された石灰石造の人像の首に依てインダス人が低き前額、短き直狀の鼻、僅に後退する頤、厚く突き出した唇、頬や頤にまばらに生えた鬚、少しも波狀を呈せざる直狀の毛髮などを特徵とせるものであつたらうと述べた。

之を要するにインダス文化を生みしインダス人は、最古のインド・アーリア人たる所謂吠陀アーリア人、即ち馬に乗り、鐵器を作り、護身用の甲冑を持ち、牝牛を最神聖の動物と見做し、家庭の爐を最神

聖の場所と考へた民族とは全く關係なく、それとは別個の、即ち馬を飼はず、鐵器や甲冑を知らず、牛の代りに牡牛を崇拜し、家庭に神聖なる爐を設けざりし民族に屬して居た。インダス人の建設せし都市は幅九乃至三十四呎の整然たる直交街路とそれに面して殆ど凹凸なき平行線を爲して立ち並ぶ家屋を備へてゐた事から推して、その社會が當然かゝる都市計畫の實現を可能ならしめる程の中央集權的統制の下に置かれてゐたものと考へられる。又多くの出土品から見てもインダス人が單に農業のみならず商業及び工業に於ても驚くほど優れし事が認められ、更に半裸體のテラコッタ製女人像の多く發見された事によつて、インダス人も近東及び中央アジアの各地で廣く崇拜された大母神を祭り、且つその偶像を拜するの風習を持ちし事が窺はれる。殊に彼等が特殊の象形文字を刻んだ印章を殘した點から見てもその文化が當時としては極めて高度のものであつた事が知られるのである。このインダス人が果して、多くの學者の推定する如く、後世のドラヴィダ人の祖先であるか否かは今後の研究を待つて決定せられるであらうが、兎も角彼等が印度に於ける最古の文化的民族の代表者だつた事は確實である。

四　吠咤アーリア人時代の先住民

印度の古今を通じ最も高き文化を創造し、從て又印度文化の代表者たるべき民族は云ふまでもなくインド・アーリア人である。彼等は恐らく中央アジアのオークサス河とシル・ダールヤ河との中間の牧草

地帶に住みし遊牧諸部族の子孫であつて、牧草地の涸渴とか或は又他の侵入部族の壓迫とかの如き何等かの原因に基いて南方への移動をはじめ、その一部はイラン地方へ入つて後世の有名なアケメニア王國を建設し、又他の一部はヒンズー・クシュの山々を越えてアフガニスタンに入りカーブルその他の中を経て印度のパンジャーブ地方に侵入したのであつた。彼等は自らアールヤ（はじめは同族仲間を、後には高貴を意味した）と稱したが、印度侵入のこれらの部族及びその子孫を後世になつてインド・アーリア人と呼ぶに至つたのは決してインド人とアーリア人の混血族と云ふ意味ではなく、寧ろ印度に入る諸族の彼方に殘留せし他のアーリアの同族との區別を立て、印度に住むアーリア人を意味したに過ぎない。

アーリア人の印度侵入は大體に於て西紀前二〇〇〇乃至一五〇〇年頃からであつたと推定されて居るが、その移住の波は相當長期に亘つて反覆されたらしい。又彼等の侵入目的も必ずしも武力的征服にあつたのではなく、寧ろ最初から妻子や家畜をまで同伴せる平和的移住であつた。彼等はやがてパンジャーブ地方からガンヂス河流域地方へ進出してそこに定住するようになり、又中には極めて古き時代既にプラヤーク（Prayag、今日のアラハバード）にまで南下せるものもあつた。けれども彼等の勢力が更に東方のビハールやベンガールにまで波及したのは餘程後世のことであり、況や南印度への影響の如きは常に甚だ稀薄だつたのである。

さて純然たる外來移住民たりし吠陀アーリア人がその侵入移動に際して相遇した印度の先住民には如何なるものがあつたであらうか。吾々は印度最古の文學たる梨俱吠陀十卷一千有餘の讚歌の中に散見せられる極めて乏しき記述によつて多少はこれら先住民の様子を窺知し得るも、結局その正確なる人種的並びに文化的性質は不明不詳と云ふより仕方がない。先づ梨俱吠陀の中で先住民を指稱したと思はれる名辭に Dasa 又は Dasyus と云ふのがある。これは普通に惡鬼を意味し、吠陀アーリア人から見て一切の非アーリア的印度先住の土人又は彼等に敵對反抗せし者に對して適用された廣義の名辭であつた。而してこのダーサの中には Illica, Dhuni, Chumuri, Pipsu, Varchin, Cambara (3, b, 八四頁) など個々の土民が居た。これらの先住ダーサに對して習俗を異にし人種的優越感を最初から懷いてゐたアーリア人が常に侮蔑的態度を示した事は云ふまでもない。色白く、狹鼻、高身をその身體的徵表とせる吠陀アーリア人はまづ第一に varna 卽ち皮色に於て先住土民と自分達との區別を意識した。このヴァルナなる語は後に色の意味から轉じて姓階を指すことになり、又皮色の黒いダーサの一部はやがてスードラと呼ばれて最下の奴隸的姓階に固定されるようになつたのである。

次にダーサの容貌と言語とに就いても梨俱吠陀の中に之を推察するの手掛りとなる語がある。例へば anasah と云ふ語は梨俱吠陀では鼻無しを意味し、從て斯く形容されたダーサが、今日の前ドーラヴィダ人の如く、甚しき廣鼻型の人種に屬せし事を示した。更に又梨俱吠陀ではダーサを形容するに mridhr,

avachahなる語を以てする事があつたが、キトス(3、b、八五頁)によると、この語は敵の語を語る所のと云ふ意味を持ち、從てダーサの言語は吠陀アーリア人には全く理解し難き疊語のようなものであつた。即ち先住土民と新來のアーリア人とは互に相通せざる別個の言語を使用せし事がこれに依て明かに知られるのである。

以上述べし如くダーサは皮色の黒い、鼻の低い、不可解な土語を使用する文化の程度劣れる民族と見做されたが、而も又梨俱吠陀の傳へる所によるとダーサは必ずしも皆蒙昧又は野蠻だつたのではない。

大なる富める都市に住み、諸種の技能に優れ、又一種の城寨を築いてアーリア人に對抗した者もあつた。恐らくそれはハラッパやモヘンジヨ・ダローの住民の如きものを指したのではないかとも思はれる。又ダーサがアーリア的の獻犧を行はず、陽物崇拜や卑猥な儀式を營みしを非難して不淨不信と見做した文句も梨俱吠陀の中に見られるから、アーリア人とその先住土民とは宗教及び習俗に於ても全く相容れなかつたものと考へられる。勿論自己の住地を保持せんと防禦及び抵抗を繼續した先住民を次から次へと壓迫し攻撃した吠陀アーリア人はやがて征服民族として廣大なる地域を占據するに至つたのではあつたが、而も彼等は決してダーサの全面的絶滅を計つたのではなかつた。他方又ダーサの中には新來異族の攻撃を受ける前に早くも北又は南の地方へ避難せるもの、又大に抗争した後遂に屈服してアーリア人の奴隸となつたものもあつた。ダーサの女にしてアーリア人の奴隸となれる者は Dasi と稱せられたが、

奴隸は女ののみならずダーサの男にも少くなかった。かの有名な「ブル・シヤ」の歌に於てはじめて現れたスンドラなる名辭は恐らくダーサの中で最も早くアーリア人に征服されて奴隸となるものを指したのである。何れにしてもインド・アーリア人とダーサとは必ずしも常に敵對關係を持續したのではなく、その間に平和的友交關係を結んだもの、或は又通婚による融合を遂げたものもあつたのである。

吠咤アーリア人にとっての先住民たるダーサに就いては以上述べしが如き事の外には殆ど何も知られて居ないが、學者の中には兩者の區別は單に宗教的信仰の相違に過ぎずして人種的のものにあらずと説くものもあると云ふ（11、序文一九頁参照）。けれども矢張り兩者はその身體的徵表に於ても亦文化的方面に於ても根本的に異なりしものと見るのが妥當であらう。但し今日の所梨俱吠咤に現れたダーサなる先住民に就いては未だ明確なる人種學乃至民族學的認識が得られたわけではないのである。

五 ドラヴィダ人

(イ) リスリーの人種學的研究

現代印度の住民の種類及びその人種學又は民族學上の研究は既に多くの學者の試みた所であるが、而も甲論乙駁、未だ眞に満足し得べき定説の確立には達してゐない。けれどもこの種の調査研究に比較的

早く着手し、且つ現住印度諸族の分類に人種學的方法を適用した學者として H. リスリー (11) の名は第一に擧げらるべきである。勿論今日ではリスリーの分類と所論とをそのまま採用することは出來なくなつたが、而も印度現住諸族の科學的研究を志す者にして彼の學說を無視することは決して許されない。

リスリーは先づ頭形、皮色、鼻形、身長その他の人種學上の身體的徵表を標準として印度の住民を次の七種（ネグリート種たるアンダマン島住民を加へれば八種）に大別した。即ち(1)トルコ・イランニア
ン (2)インド・アーリアン (3)スキト・ドラヴィディアン (4)アールヨ・ドラヴィディアン (5)モンゴロ・ドラヴィディアン (6)モンゴロイド (7)ドラヴィディアンの七種 (11、三三頁) これである。リスリーは又彼の所謂ドラヴィダ人なるものがその現住地の地理的分布、彼等の中の最も原始的な部族に見られる身體的徵表の一様性、彼等の物活教的宗教、特殊の言語、石造紀念物、原始的トーテミズムなどから判斷して結局印度最古の住民と認むべき事を主張した (11、四八頁)。而してリスリーが印度の原住民と考へたこのドラヴィダ人は大體に於てヴィンディア山脈からコモリン崎に至るまでの間の最古の地理的成層、森林地帶及び起伏ある平原等に住み、半島部の兩側では東西の兩ガーツに沿ひ、又北方ではアラヴァッス及びラジマハールの丘陵地帶にまで分布せるものと見られた。又ドラヴィダ人の身體的徵表としては特に未だインド・アーリア又はモンゴロイドの何れの血液上の影響をも受けざる比較的純

粹のドライダ人を標準となし次の諸點を擧げた。即ち低身、暗皮色(殆ど黒に近い)、屢々捲毛状を呈する豊富な毛髮、暗色の眼、甚しき廣鼻(時として鼻根が壓平されてはゐるが、而も顔を扁平に見せる程ではない)、比較的に長き前脣(11、三四頁)等である。かかる特徴を呈するドライダ人は單に人里離れた山岳地方や叢林地帶にのみ住んで居るのではなく、農地や都會の苦力として下賤な労働に從事するものもある。例へばアッサム、デュアールス、及びセイロンでは茶畑で勞働し、遠くフィージー島では甘蔗を栽培し、東ベンガールの水田では稻を刈り、カルカッタ、ラングーン、シンガポール等の都市では街路掃除夫として驅使されてゐる(11、四五頁)とも云ふ。

リスリーの分類せるドライダ人の大體の特徴は以上の如くであるが、茲で序にドライダなる名辭に就いて述べて置く必要があると思ふ。バーネット(3、(a)、五九三頁)によれば Dravida 又は Dramida (英語化して Dravidian となる) は巴梨語では Damila と稱し、何れもその語原たる Tamil と云ふ形容詞の轉訛である。而してこのタミルは一種の部族の名である。從て嚴密に云へばドライダ人とは本來タミル族の事であつたが、それが廣義に解されてタミル族をも含む同系統の亞種全體を指稱するようになつたと。他方又ドライダなる名稱は同系統の一切の方言を含む言語にも適用される。かくて例へばタミル、マラヤラム、テルグ、カナリーズその他同系の諸方言は何れも廣義ドライダ語に屬するものと見られる。更に又グアーライ(5、一一五頁)によればドライダとは梵語使用の著者達がマラ

ヤラム及びタミル兩語の行はれる地方を總稱して Dravida de'a (ドラヴィダ語の國) と名づけ、以て Andhra de'a (アンドラー語、即ちテルグ語、の國) に對立せしめた事によつても窺はれる如く、特定の語族を指す形容詞であつたが、今日ではドラヴィダ語は單にマラヤラム及びタミルの兩語のみならず、テルグ、カナリーズその他同系の諸方言をも含むものと解されるようになつたと。從てこの場合ドラヴィダ人は結局廣義ドラヴィダ系言語を使用する語族の意味であつて、リスリーの擧げたような身體的徵表には限定されないのである。

(口) 前ドラヴィダ族

リスリーの所謂ドラヴィダ人は極めて廣義の包括的名辭であつたが、その後このドラヴィダ人の中に種々の異族を分析する學者が出て來た。例へば上述のバーネット (3、(a)、五九四頁) は廣義ドラヴィダ人を再分して前ドラヴィダ、原始ドラヴィダ、及びドラヴィダ (狹義) の三族の別を立てた。彼に従へば西紀前數千年の古き昔印度の大部分に亘つて暗皮色ネグロイド型の、文化の程度甚しく低き種族が住んで居た。これ即ち彼の所謂前ドラヴィダ族 (Pre-Dravidians) である。然るにその後この前ドラヴィダ族とは全く別個の人種に屬し、而も文化の程度遙に高く、且つ今日のドラヴィダ語の源をなせるシシア語 (Scythian) に近き言語を使用する種族が北及び北西の方面から漸次にインダス河流域の低地に侵

入し、そこから更にヴィンディア山脈以南の地域へと南下して來た。これ即ち原始ドラヴィダ族(Proto-Dravidians)であり、この種族が更に長年月に亘り印度の各地で種々の先住異族と通婚して出來た混血族が歴史上の所謂ドラヴィダ族(Dravidians)である。從てドラヴィダ族は原始ドラヴィダ族の身體的徵表を多少は遺傳して居る。他方又ヴィンディア山脈以南の地方に住む前ドラヴィダ族は何れも皆その固有の言語を喪失して原始ドラヴィダ族の言語を轉用したばかりではなく、印度半島部の中及び南、殊にタミル、カナリーズ、テルグ等の言語を使用する前ドラヴィダ族の多くは原始ドラヴィダ族と混血して了つた。

バーネットは以上の如く說いて廣くドラヴィダ人と稱せられるものの中に原始ドラヴィダ族及びドラヴィダ族とは全く異なる先住民としての前ドラヴィダ族なるものを區別したのである。もしこの區別が正しいとするならば彼の所謂前ドラヴィダ族こそは印度に於ける眞の原住民であると云はなければならない。然らばこの前ドラヴィダ族は如何なる點で他の諸族と區別されるのであらうか。

今日前ドラヴィダ族と稱し得る種族は主として南印度の叢林地帶、西及び中央印度の山岳地方などに遠く離れて住み、又ラジュプター及び聯合州などの最下層の社會にも混入して居る。グアーライ(5、一一六頁)によれば元來前ドラヴィダ族は南印度の最初からの原住民であつたが、後に侵入して來たドラヴィダ族(バーネットの所謂原始ドラヴィダ族に相當す)のために追はれて僻陬の地に遁入したり、

或は又他の新來異族に壓迫されて最下層の社會に潛在せしめられるに至つた。今日の Kadir, Kurumba, Paniyan, Isula 等の諸部族は前ドラヴィダ族の代表的なるものである。又ハッドン (6, 110 及び 107 頁) に從へば彼等の身體的徵表は次の如くである。即ちカデイル及びパニヤンは著しく縮れた黒毛毛髮を持つが、他の前ドラヴィダ族の諸部族に於ては毛髮もそれほど縮れてゐない。又身長は一般に約一・五七五米又はそれ以下の低身型であり、頭は七三乃至七五の指數を示す長頭型に屬し、更に鼻形指數は九五・一 (パニヤン)、八九・八 (カデイル)、八八・八 (クルンバ)、八五 (イルラ)、八四・六 (カニバル) 等であつて、何れも著しき廣鼻型である。尙ほ西部印度の Bhil, Katkari, Musahar, Pasi, Chamar 等も典型的な前ドラヴィダ族と見做されて居る。

前ドラヴィダ族の大部分は既に定着と農耕の生活に移つてゐるけれども、今尙ほ山間の僻地に住んで遊牧的な狩獵や植物採集の生活を續けて所謂原始又は自然民族の域を脱せざるものも少くないので、多くの學者はこれを以て印度に於ける石器時代住民の名残りと見做して居る。かくて今日知り得る限りに於てはこの前ドラヴィダ族を以て印度最古の先住民、即ち原住民と考へるのは大體に於て妥當であると思ふ。尙ほハッドン (6, 110 頁) はマライ半島のサカイ族又はセノイ族、セイロン島のヴェーダ族をも前ドラヴィダ族の中に數へ、又グーハ (B. C. Guha 5, 一一七頁に引用) は前ドラヴィダ族の中にネグリートの特徵の混入せる事、殊にカデイル部族の唇の著しく厚いのはその適例である事などを指摘し

た。

(八) ムンダ族

前ドラヴィダ族に次いで古き印度先住民と見做さるものにムンダ族がある。リスリーはこれをドラヴィダ人の一部族と見做し、その頭形指數が七四・五なること(11、四五頁)又 Munda なる名稱が梵語起原のものであつて、村の主長を意味し、この部族の成員及び族外の人々によつて使用された稱號又は職能的呼稱であつた事など(11、四四九頁)を述べたに過ぎない。然るにグアーライ(5、一一七頁)はムンダ族を以て廣義ドラヴィダ人中の他の諸族とは全く起源を異にせる特殊の種族であると考へ、身體的には極めて僅に中頭に接近する長頭、指數八〇以上の廣鼻を特徴となし、今日のムンダ、サンタル、ムサハールの諸部族及びビハール州のチャマールなどを以てその代表的實例だと見做した。

ムンダ族の密集住地は東部印度のチヨーダ・ナグプール及び西部ベンゴールであるが、更にビハール州にもその一部が住んで居る。彼等は又共通のムンダ語(この語に就いては松本信廣教授の近著、印度支那の民族と文化、二五一頁以下に詳論せらる)を使用し、嘗てこの地方に榮えたムンダ文化なるものを發達せしめた。但し所謂ムンダ族の中にもインド・アーリア系又はドラヴィダ系の言語を使用するものがあるから、用語のみによつてこの種族を區別することは出來ない。ラプスン(3、(c)、四一頁)に

よればオーストラリア語系に屬するムンダ語に關する研究は印度最古の人種的要素がドラヴィダ系のものだつたとなす從來の學說を改變せしめた。言語の上ではこのオーストラリア語系のものが最も古く、ドラヴィダ語系のものが之に次ぎ、更に遅れてアーリア語系のものが印度で行はれるようになつたと。

若しラプスンのこの説が正しいとすればムンダ族は原始ドラヴィダ族に對して先住民であつたわけである。尤も今日のムンダ族とドラヴィダ族との間には身體的徵表の相違がないと主張する學者も少くないが、之に對してラプスンはこの不相違が永き歲月に亘る兩種族混血の結果生じたものであつて、決して兩種族の人種的起原の相違の否定とはならぬと主張した。尙ほ彼によればムンダ語はアッサム及びビルマのモン・クメール語と共に地球上に廣く散布せしオーストラリア語系の代表的遺存であつて、現にサンタル・バルガナス及びチヨータ・ナグプールに於てのみならず、中央州のマハーデオ丘陵地、マドラス州の北方地區などに於ても行はれ、パンジャーブからベンゴールに至るヒマラヤ山系外邊に沿うて一種の連鎖を作る多くの混成的方言の根底をなすと云ふ。

上述の如くムンダ語がモン・クメール語即ちオーストラリア語と密接な關係を持つこと、更にそれがインドネシア、メラネシア、ポリネシア等のオーストラロネシア語にも共通する所があると云ふことはムンダ族そのものの移動經路を知る上に大なる暗示を與へるものである。尤もリスリー(11、四七頁)もこの事に言及して特にムンダ語の數詞とオーストラリア語系方言の數詞との類似、又南印度にもオース

トラリアに於けると同様の原始形式の飛去來器 (boomerang) の存すること、更に又マダガスカル島からマライ半島に連續したレムリア (Lemuria) 大陸の陥没に關する假説などに注目したのではあつたが、而も彼は結局印度とオーストラリアとの人種的、言語的連關係を否定する立場をとつたのであつた。これに反してグアーライ (5、一一七頁) はムンダ族とオーストラリアとの關係を重視し、例へばレイ・バードウール・ロイ (Rai Bahadur S. C. Ray, *The Oraons*) の説を引用してムンダ族の一部族たるオラオンには祖父がその孫娘と結婚する奇習があり、他方又同様の奇習がスマラネシアに於ても見られる事、更に又新石器時代の所謂有肩石斧 (shouldered celt) が印度ではベンゴール及びアッサムの高原地方にしてムンダ族の住地にのみ發見されたのに、同様の石器がマライ半島に於ても出土した事などを述べて次の如き結論を下した。即ちムンダ族は元來オーストラリア系の人種に屬し、古く新石器時代にマライ半島から印度に移住したものと見做し得ると。グアーライのこの見解が正しいとするならばムンダ族は前ドラヴィダ族に次いで印度に現住する最も古き先住民であり、且つその系統も他の諸族とは全く異なるものと認められるわけである。

(二) 原始ドラヴィダ族

リスリーの擧げたドラヴィダ人なる人種誌學上の名辭は甚だ不明確なものであり、その中には上述の

前ドラヴィダ族やムンダ族の如く嚴密な意味ではドラヴィダ族と稱し難いものも含まれて居た。從て純粹のドラヴィダ人即ち原始ドラヴィダ族は種々の點で前ドラヴィダ及びムンダの兩族とは異なる起源及び性質を持つてゐる。先づ今日原始ドラヴィダ族の代表的實例として擧げられるものには Nayar, Tiy-an, Badaga, Agamudaiyan, Vellala 等がある。而してこれらの諸部族は何れもタミル語及びマラヤラム語の行はれてゐる南印度に住む。彼等は指數七五以下の長頭、七七以下の中鼻、體毛の少ることなどに於て他の類似諸族から區別される (5、一一八頁參照)。例へば屢々原始ドラヴィダ族と混同せられ易き南印度マラバール地方の Nambudiris なる部族の如きは自ら原始ドラヴィダ族のように見せかけるために頭以外全身の毛を剃ると云はれてゐるが、これは同地方の原始ドラヴィダ族が何れも頬や胸の毛が甚だ少く、又マラバールの上流社會では人に對して毛深いと云へば相手を非難する意味になるからであると云ふ。以て原始ドラヴィダ族の體毛少すこと、多毛を輕蔑する風のある事が窺はれる。尙ほこの點に連關してグアーライ (5、一一九頁) は原始ドラヴィダ族をエリオット・スマスの所謂褐色人種 (長頭、黃褐皮色、低身、體毛僅少などをその人種的徵表とす) に結びつけ、恐らく原始ドラヴィダ族はメソポタミア又はアラビヤ地方より移動し來れるものであつたらうと考へ、同時に又原始ドラヴィダ族の家族構成が母系制であるのもこれら褐色人種に於けると同様であると說いた。

事實原始ドラヴィダ族は印度に於ける眞の原住民ではなく、史前の可成り古き時代に侵入し來れる外

來種族の子孫である。考古學者（10、(a)、一一三頁）の傳へる所によれば、南印度のタムラバールニ河流域、特にテインネヴェリ地方の砂利質小丘に於て鐵器時代の遺物が多く發見され、而もそれらの遺物は何れもアーリア人の北印度侵入時代既に南部地方に定住してゐた原始ドラヴィダ族の殘せしものと認められる。從て原始ドラヴィダ族が吠咤アーリア人以前の印度先住民であり、且つ鐵器文化を持ちしものなる事が明白となつた。けれどもかかる遺物によつて推定される原始ドラヴィダ族の祖先が果して何處より印度に移住して來たかの問題は今日なほ未解決である。リスリー（11、四八頁）はハンター（William Hunter, The Indian Empire）の説を引用してバルチスターの一地方の方言たるブラーイ語（Brahui）とドラヴィダ語との類似に關する問題を取りあげた事があるが、而も彼自身はハンターの説を否定したのであつた。然るにラプスン（3、(c)、四二頁）はハンターの説に賛成してバルチスターのブラーイ語族は嘗て原始ドラヴィダ族が同地方から印度に移動せしものなる事を證明する根據となると主張した。勿論逆に原始ドラヴィダ族が印度からバルチスターへ移動したときの名残りがブラーイ語族となつてゐると考へる事も不可能ではない。けれどもラプスンはこの方面一帶に於ける民族の移動は殆ど常に外部から印度への方向をとるのが原則であつたから、矢張り原始ドラヴィダ族の移動もバルチスターの方から印度へと向つたものと解釋すべきだと推論した。斯く考へたラプスンは更にスマリア人と原始ドラヴィダ族との類似性から見てバルチスターにブラーイ語を殘した

原始ニラヴァイダ族はやるよりか、歴古の時代に西方アジアより移動して來たものらしいと想ぐた。

以上數項に亘り私は印度先住民の統一の種等の見解を論述したが、結局吠陀アーリア人以前の出
なる先住民には原始ニラヴァイダ族、バハダ族、前ニラヴァイダ族の諸種族があり、その中最古の先住民、
即ち原住民として今日まで遺存するものは前ニラヴァイダ族であると想ふ。

参考書

1. Brown, Coggins, Catalogue of Prehistoric Antiquities in the Indian Museum, 1917.
2. Carlton, P., Buried Empire, London, 1939.
3. The Cambridge History of India, Vol. 1, Ancient India, edited by E. J. Rapson, Cambridge, 1922.
 - (a) The Early History of Southern India, by L. D. Barnett.
 - (b) The Age of the Rigveda, by A. Berriedale Keith.
 - (c) Peoples and Languages, by E. J. Rapson.
4. Foote, Bruce, Indian Prehistoric and Protohistoric Antiquities, Madras, 1916.
5. Ghurye, G. S., Caste and Race in India, London, 1932.
6. Haddon, A. C., The Races of Men, Cambridge, Revised Edit, 1929.
7. Logan, A. C., Old Chipped Stones of India, Calcutta, 1906.
8. Mohenjo-Daro and the Indus Valley Civilization, 3 Vols., edited by John Marshall, Probsthain, 1931.
9. Rawlinson, H. G., A Concise History of the Indian People, Oxford, 1938.

10. Revealing India's Past, edited by John Cumming, London, 1939,
 - (a) Prehistoric and Protohistoric Civilization, by N. G. Majumdar.
 - (b) Inferences from Chemical Analysis, by Khan Bahadur Sana Ullah.
11. Risley, H., The People of India, 2nd Edit., edited by W. Crooke, Calcutta, 1915.
12. Smith, Vincent A., The Oxford History of India, From the Earliest Times to the End of 1911, 2nd Edit., Oxford, 1925.
13. Waddell, L. A., Egyptian Civilization, Its Sumerian Origin and Real Chronology, London, 1930.